

連絡会ニュース

子どもと教育・くらしを守る広島県立学校教職員連絡会

No.1335 2025/05/22 (THU)

発行 広島高校連絡会事務局

Email renraku-kuko@mx6.tiki.ne.jp

HP <http://ww6.tiki.ne.jp/~renraku-kuko/>

携帯 090-1180-7644 (村井義幸)

090-9738-8264 (望月照巳)

「戦争」に対する想像力を高めるとは…

～中園ミホ脚本 朝ドラ「あんぱん」から～



「のぶ」も「たかし」も変わったのか？！

昨年の朝のテレビドラマ「虎に翼」も大きな反響がありました。私もこの「連絡会ニュース」で「毎日が憲法授業」など、何度も話題にしました。憲法と人権を真正面から扱う朝ドラが斬新でした。脚本家の吉田恵理香さんの挑戦に大きな拍手です。ただ、最後の2ヶ月～1ヶ月は重要な話題を多く入れ込もうとして、エンタメとしての未消化感を私は感じていました。現在放映されている「あんぱん」は、だれでも知っている「アンパンマン」の生みの親、漫画家やなせたかし(本名・柳瀬嵩)さんと小松暢さん夫妻の半生をモデルにした物語で、脚本家中園ミホのオリジナル作品です。実際のやなせたかしの言葉も織り交ぜながら展開する台詞や演技がすばらしく、毎回緊張感をもって見えています。

その一つが5月15回(水)に放映された33話のシーンです。時代は1938年。日中戦争が始まり、若者の軍隊への召集もはじまり、世の中に戦時気運が高まった頃、高知県の女子師範学校に通う今田美桜演じる《のぶ》が、東京の美術学校に進学した北村拓海演じる《たかし》と再会するシーン。たかしはのぶを呼び出し、お礼がしたかったと言って土産を渡します。

「美しいものを美しいものと思っはいけないなんて…僕は嫌だな」

箱を開けたのぶは、「こんな美しいもん…」と赤いハンドバッグに息をのむが…。たかしに対してこう言い放ちます。「ありがとう、でもこんなぜいたくなものもらうわけにはいかん」「…こんなもんほしがったらいかんが…。たかしも戦地の兵隊さんのこと考えてみいや」「たかしは何じゃわかっちゃせん。うちらと同じ若者がお国のためにたたかういうがで…その若者らのこと考えてみいや。こんなぜいたくなものに使うお金があつたら、たかしも戦地の兵隊さんのために献金するべきや。そうは思わん?」。

たかしは沈黙のあと、小さいがしっかりした声で答えます。「思わない。のぶちゃんだってさっき『こんな美しいもん』と言ったじゃないか。喜んでくれたと思った。」「美しいものを美しいものと思っはいけないなんて、そんなのおかしいよ。のぶちゃんが先生になったら子どもたちにもそういう風に教えるの?そんな先生、僕は嫌だな」「ボクが知っているのぶちゃんは、正直すぎるくらい正直で、おもしろい女の子だった!」

女子師範学校に通うのぶは卒業式で、忠君愛国、皇国臣民の育成をめざす女子教員としての覚悟を問われます。「勝利の日まで一命を賭して銃後をささえ、学びの庭でがんばる」決意を表明します。戦争の進行の中で変わっていくたかしとのぶ。その溝も大きくなります。これからどう展開していくのでしょうか。

ドラマでの戦争の描き方は、さまざまですが、ドラマを通じて戦争とは何なのかを感じ、想像力をもつことが戦後80年、戦争体験者が少なくなっている今こそ私たちの大きな課題なのでしょう。でないと…。国会議員である西田昌司の発言や参政党の神谷宗幣代表のように「日本軍の人たちが沖縄の人たちを殺したわけではない」というウソがまかり通り、あったことがなかったことにされてしまうのです。

西田議員もガマに入ってみよ!

自民党の西田昌司参院議員の「ひめゆりの塔」(沖縄県糸満市)の展示内容をめぐる講演に対し多くの抗議の声が上がっています。この講演はひめゆりの塔の説明について「今はどうか知りませんが、ひどい」「要するに、日本軍がどんどん入って来てひめゆり(学徒)隊が死ぬことになった。そしてアメリカが入ってきて沖縄は解放された、そういう文脈で書いている。亡くなった方々は救われない。歴史を書き換えられると、こういうことになる」と述べたものです。これに対しひめゆり平和祈念資料館の普天間朝佳館長は、塔や資料館には西田議員が発言したような記述は過去にも現在にもないときっぱり。「資料館の展示は体験者の話がベース。沖縄戦を体験した県民や、ひめゆり学徒隊の過酷

な体験を否定する発言だ」と怒ります。「ひめゆりの資料館というのは、元学徒の方々の体験をもとにつくられている。しかも一人の方の体験ではなく、お互いがもっている記憶を確かめ合いながら、研究者も関わりつくられていった資料館である」と研究者は指摘し、歴史の向き合い方が非常に雑で乱暴な西田議員の態度は「沖縄戦の体験者や研究者の方々がこれまで歴史の事実を伝えよう賭してきた思いを踏みにじるものだ」と抗議します。

私は 1990 年に沖縄学習旅行に参加したことがあります。ひめゆり学徒隊のたどった道をめぐりました。そしてガマ（沖縄の洞窟）にも入りました。闇の中にたたずむとひめゆり学徒たちの恐怖、絶望の声が聞こえてきそうでした。リニューアルしたばかりのひめゆり平和祈念資料館にも行きました。第四展示室にはひめゆり学徒隊の犠牲者の遺影と犠牲状況の説明文が展示されています。心に詰まるものがあつたことをいまでも覚えています。彼らは、戦争に翻弄された「のぶ」と「たかし」です。そのときに購入したのが右の「公式ガイドブック」です。生き延びたひめゆり学徒たちの証言が数多く載っています。証言による沖縄戦の歴史です。



ひめゆり平和祈念館
公式ガイドブック

このガイドブックの中に牛島満軍司令官の自決前の最後の命令文があります。この命令は「最後まで敢闘し、悠久の大義に生くべし」と締められています。最後の一兵まで戦えということです。米軍を可能な限り沖縄に足止めし、本土決戦に備える時間稼ぎの捨て石とする「戦略」が見えます。そのために住民の犠牲が増えてもかまわないということでしょう。沖縄戦の最大の教訓が「軍隊は住民を守らない」とされる理由はここにあるのです。自民党や日本会議、神道政治連盟にとってこんな都合の悪い「歴史」はないのです。西田議員は最後に「沖縄の場合は、地上戦の解釈も含めて、かなりめちゃくちゃな教育のされ方をしている」「自分たちが納得できる歴史」をつくるべきだと述べます。

歴史を書き換えようとしているのは西田議員、アンタだ！

「ごきげんよう さようなら」を言うにも勇気が要った時代

脚本家中園ミホさんのNHK朝ドラの前作は、2014年に放映された「花子とアン」。『赤毛のアン』の記者村岡花子の生涯を描き、これも感動的シーンが多く名作だったと思います。このドラマのキーワードが「ごきげんよう さようなら」。吉高由里子演じる花子が人と別れるときにいつも「ごきげんよう、さようなら」といいます。ドラマのナレーション役の美輪明宏さんも15分間のドラマの最後に「ごきげんよう」とドラマを毎回しめていました。主人公の花子がこの言葉の意味を話す場面があります。1930年代戦争の足音が大きくなっていった頃、花子が担当していた子ども向けのラジオ番組で「ごきげんよう、さようなら」で終わりたいと提案します。戦争の影が忍び寄っていたなか、ラジオ番組の責任者は難色を示しましたが、花子はこのように反論します。

「『ごきげんよう』は、さまざまな祈りが込められた言葉だと思います。『どうかお健やかに、お幸せにお暮らし下さい』という、祈りです。人生は、うまくいく時ばかりではありません。病気になる事もあるし、何をやってもうまくいかない時もあります。健康な子も、病気の子も、大人たちも、どうか全ての人たちが、明日も元気に無事に、放送を聞けますようにという祈りを込めて、番組を終わらせたいんです。どうか、お願いします。」

戦争というのは、戦争に行く人や家族に「死に行く道」を「この道しかない」と強いることです。否むしろ死んだ人を「英霊」（尊い魂）として誉めたたえることです。そういう時代に「ごきげんよう」と呼びかけてまた元気で再会することを祈ったりすることは絶対に許されないこと。明日がどうなるかわからない戦争という時代であっただけに「ごきげんよう」という小さな呼びかけが、より強く輝いて聞こえたことでしょう。

中園さんはいまの「あんぱん」でも、この台詞を登場させます。たかしが実の母親と別れるシーン。母親（松嶋菜々子）が「ごきげんよう さようなら」と言って別れます。前作とのシンクロが実に絶妙で見事です。「あんぱん」の今後の展開に目が離せません。

(担当：本間 英次)



▼今居る職場では、多くの職員が生協の会員で、毎週火曜日は、たくさんの物資が届けられます▼その考えている物資を職員休憩室の冷蔵庫に運び、冷凍品と冷蔵品とを分けて入れるのが、役割となっています▼働きやすい職場になれば良いなあと思いつながらの作業です。その日も、冷蔵庫の中は、お弁当や飲み物がかなり入っていて、分けて入れるのが相当難しかったです▼でも、誰も知られないけれども、ちょっとした心遣いの作業が、大きな事故や災害を防いでいることがある。例えば、川の堤防に小さな穴が開いていたのを見つけた人が、その穴にくさびを差し込んでおいた。暫くして大雨が降り、川が増水した▼もし、あの時、目にした堤防の穴を埋める行為がなかったら、堤防は決壊し多大な被害があつたに違いない▼しかし、その行為は誰からも賞賛されないし、行った当人も覚えてさえいない。村人の安全を確保したその小さな行為こそ、社会で暮らす人々の安心を担保するためのキーワードとなる。そんな気持ちの悪い社会を取り戻すために、7月の参議院選は、死を強要する時代を繰り返させぬ為、やるべきことをひとつずつ。

2025/05/22